

2015.9.29-30

北岳バットレス4尾根往復登攀

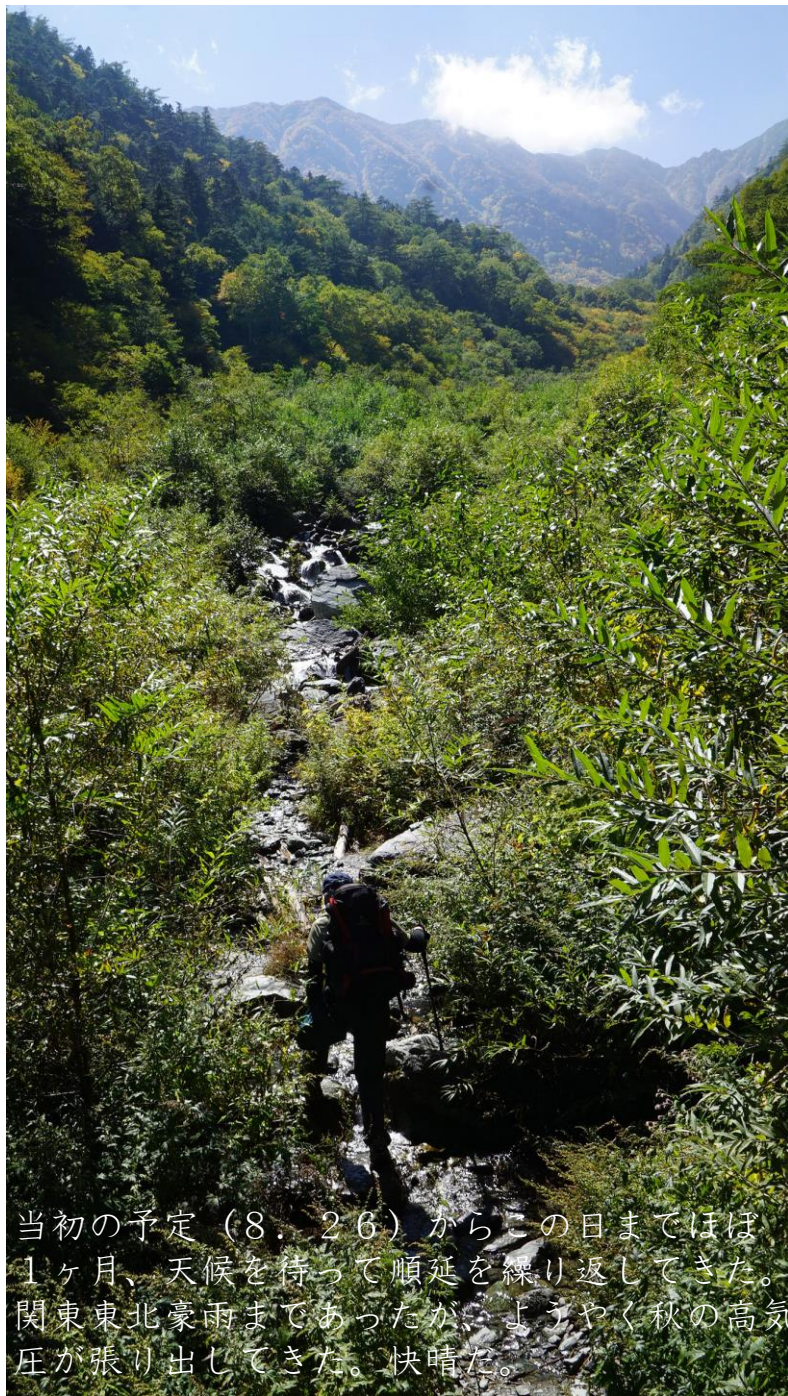
竹中彰 (s39卒)

藤原朋信 (s44)

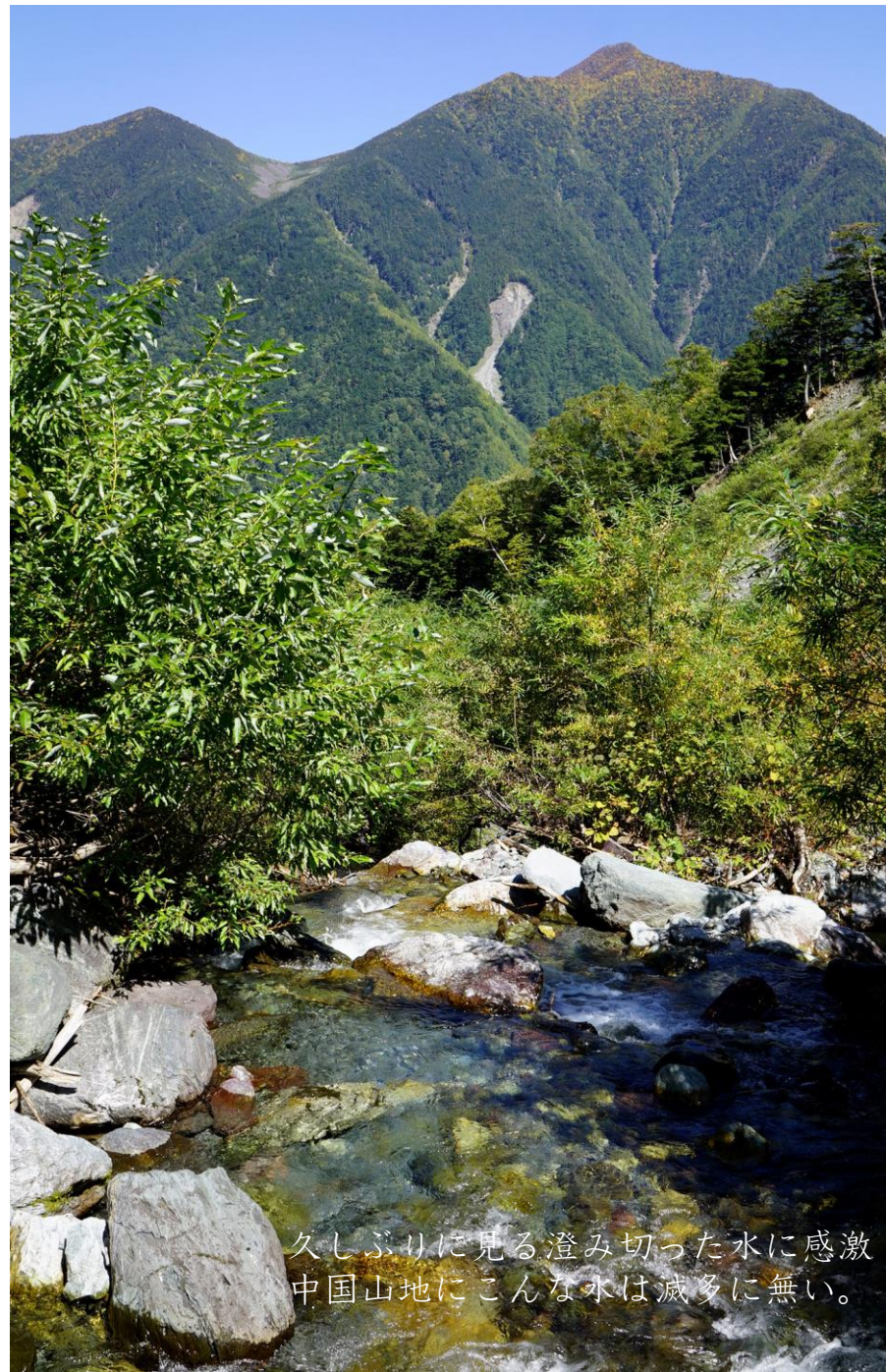
金子晴彦 (s46)



9.28の夜までに御池小屋に集合しよう。大変おおざっぱなスケジュールで参加3名、自由気ままに入山。ぼくは甲府駅で竹中さんと合流、大樺沢沿いの道を登る。沢の水量がとても多く、あちこちで見事な小滝が見られた。



当初の予定（8.26）からこの日までほぼ1ヶ月、天候を待って順延を繰り返してきた。関東東北豪雨まであったが、ようやく秋の高気圧が張り出してきた。快晴だ。



久しぶりに見る澄み切った水に感激
中国山地にこんな水は滅多に無い。



大樺沢は秋の盛り。鋼のように固い岩が銀色に輝く。



連休の次の週の平日のせいか、入山者のほとんどが尾根道を登ったせいか、人が少ない。
原始のままの大樺沢が大きく開けてきた。



逆光の中できらきらとトタン屋根のように輝いていた大岩を越える。途端に単なる大岩に変わる。
不安定な位置ながらいつもここにある。少しづつでも動いているのだろうか？
鳳凰三山の砂尾根がまるで雪の稜線のように見える。



久しぶりの紅葉。今年は赤みが足りないか。



11時に広河原を出て13:25二股着。あたりを見ても過去の記憶が曖昧なので偵察に出かける。30分ほど登ると岩壁帯が真上に見えてくる。そして大岩。そうだ、この涸沢を登り、樹林の中の急な尾根を登って、bガリーの下部岩壁を登ったのだ。入口に赤いテープを巻き付けた棒が立っていた。





沢筋を少し登ってみる。そう、確かに、2010年10月に中川さんたちと登ったルートだ。



一応偵察はここまでとして二股に戻る。対岸の紅葉が見事。
二股ではNHKの撮影クルー10人ほどが重そうな機材を抱えて撮影に忙しい。
彼らはよくも見事な晴れ間をつかんだものだ。



二股で竹中さん、そして1時間後に登り始めた藤原さんと合流、15:00懐かしの御池小屋に到着。

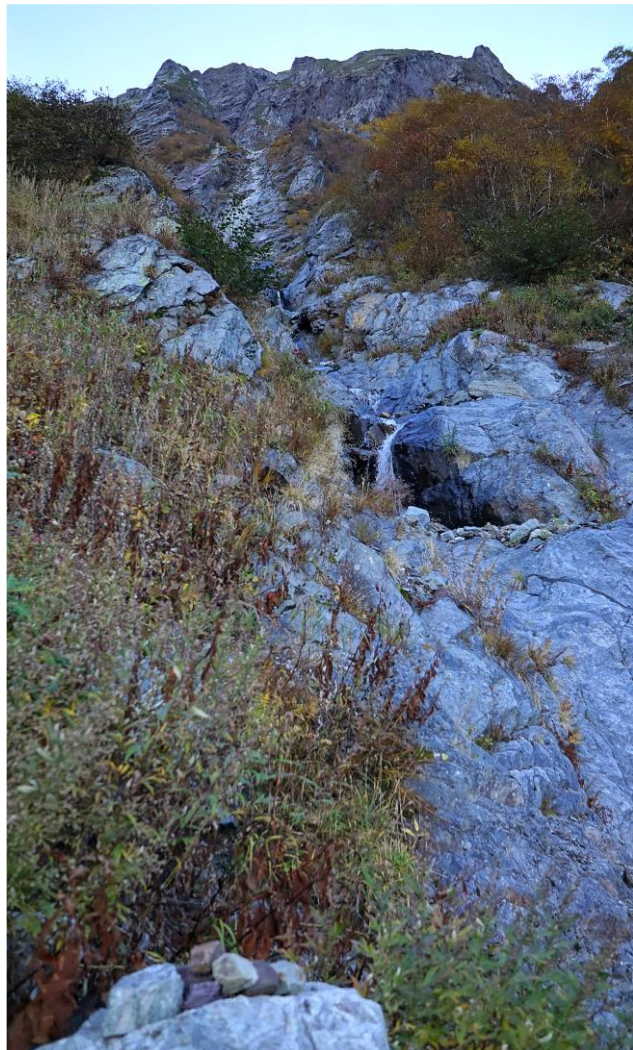


登攀前日 16 : 50。計画始動からあしかけ7年。明日の晴天が約束された。

9.29

5:30出発。4尾根上部の崩落後cガリーは落石が多くなったとのことで、今回アプローチはdガリーから5尾根下部登攀、緩傾斜帯横断、4尾根下部取付とした。

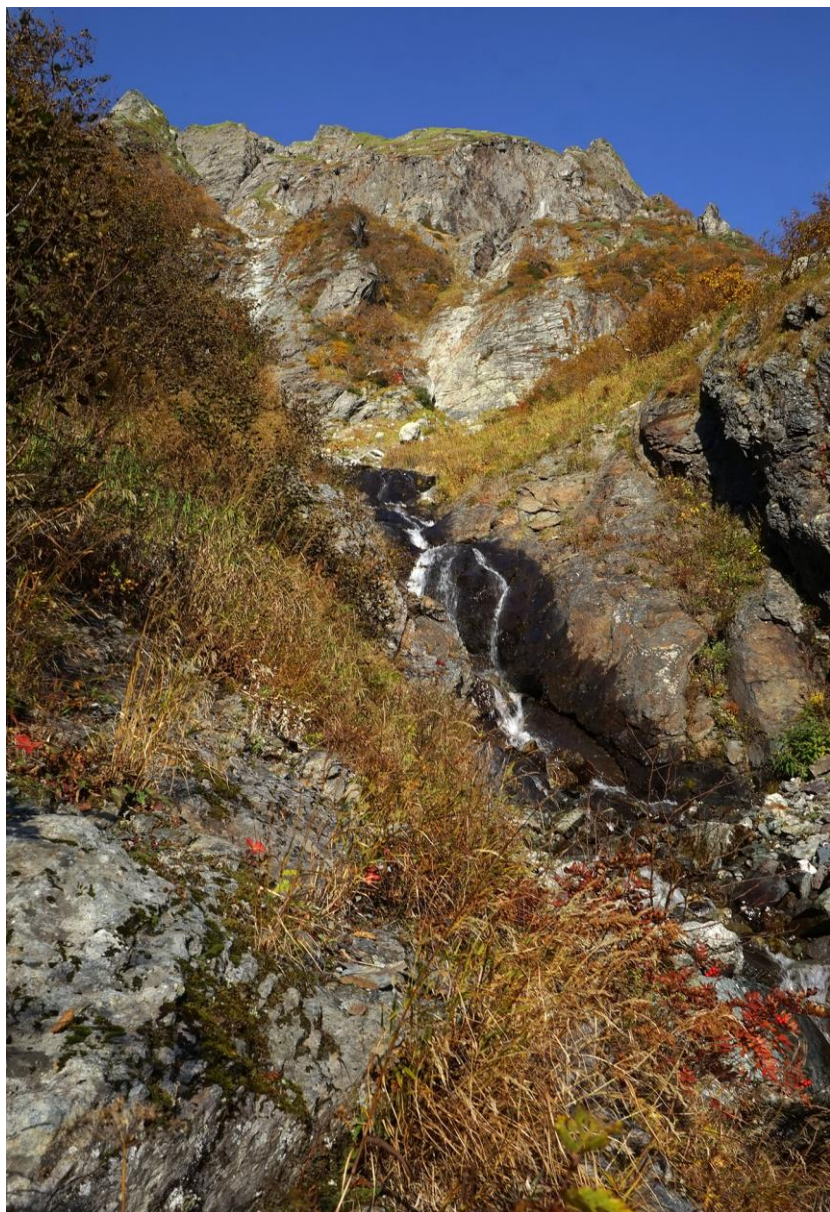
昨日偵察したバットレス沢出会地点より更に5分ほど上部にガレ沢にしてはかなりの水量のc沢が下ってきている。それを渡り、対岸の樹林におおわれた尾根の中の明瞭な踏み跡を登る。一般登山道から分かれるあたりにはあちこちに踏みあとがありやや分りづらい。真上に4尾根、その奥に中央稜が見えるのが目印か。



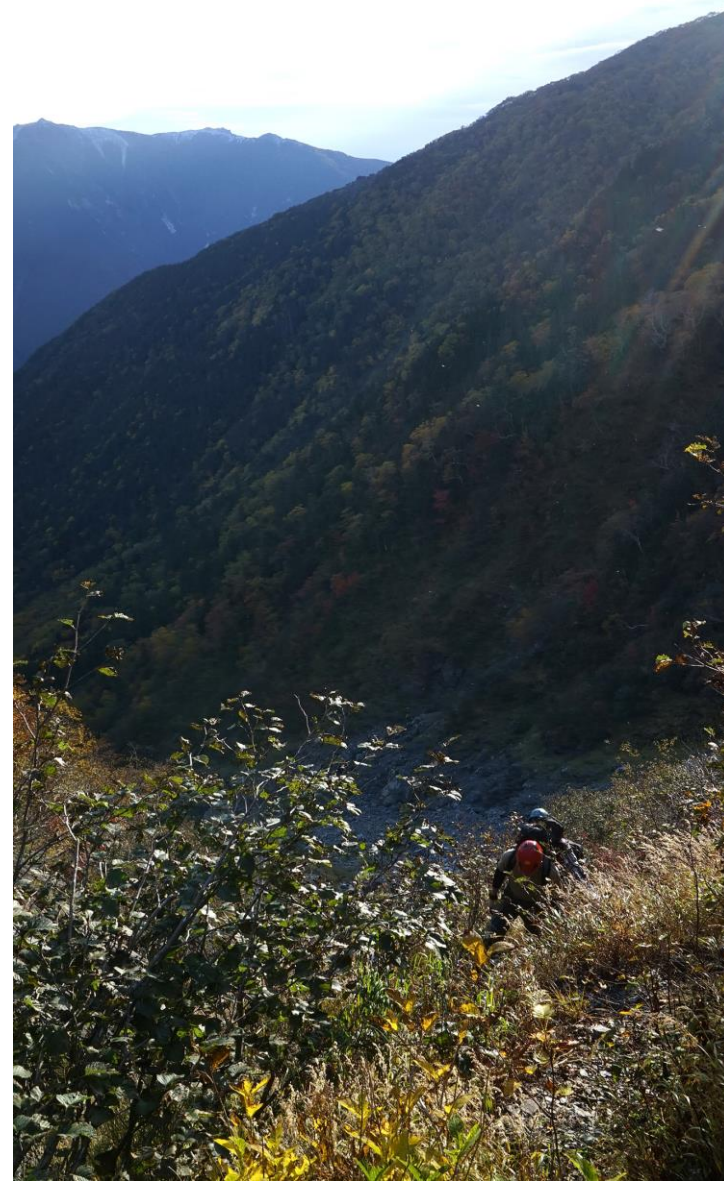


樹林の中には登山道と獣道の合いの子のような踏み跡が続いている。その土の上にかすかに先行者の足跡がある。今朝のものだ。どこに向うのだろうか？

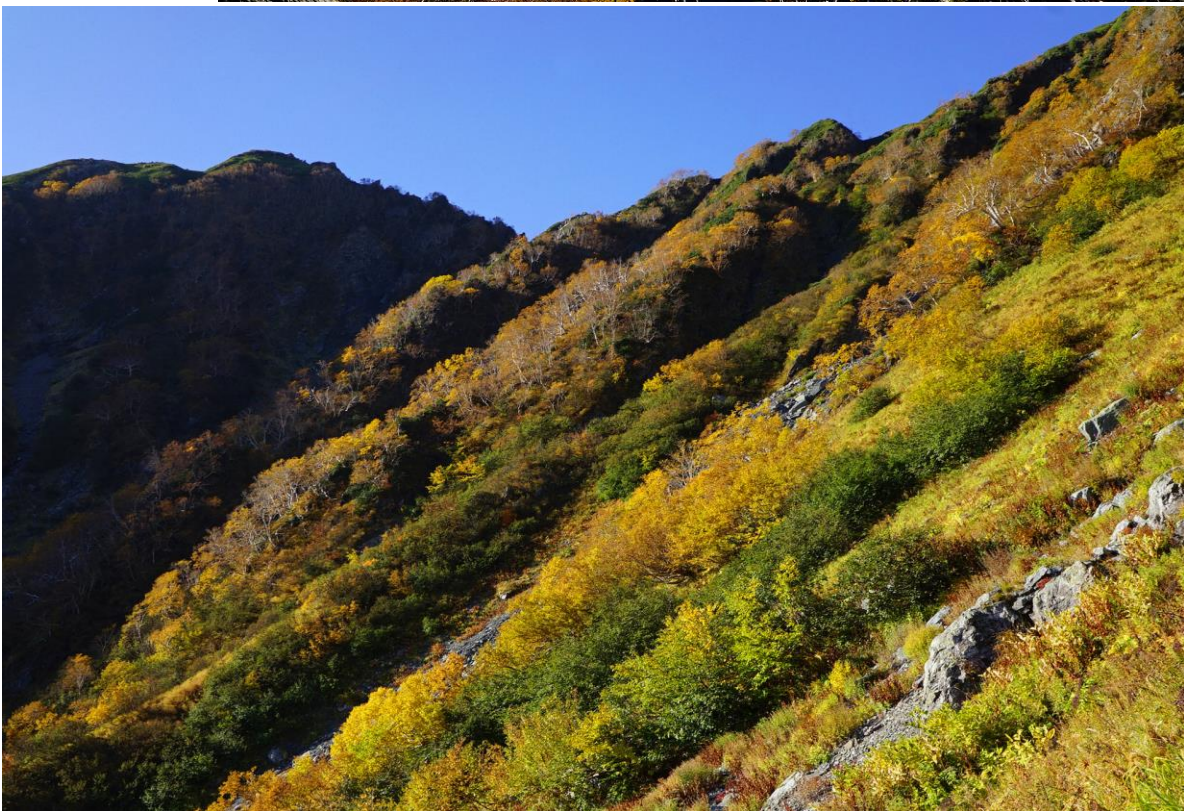




樹林の中の道は
明瞭だがかなり
急。
右手のC沢はい
くつも小滝をか
けて岩肌に食い
込んでいる。
10分ほどで樹林
が切れ始める。



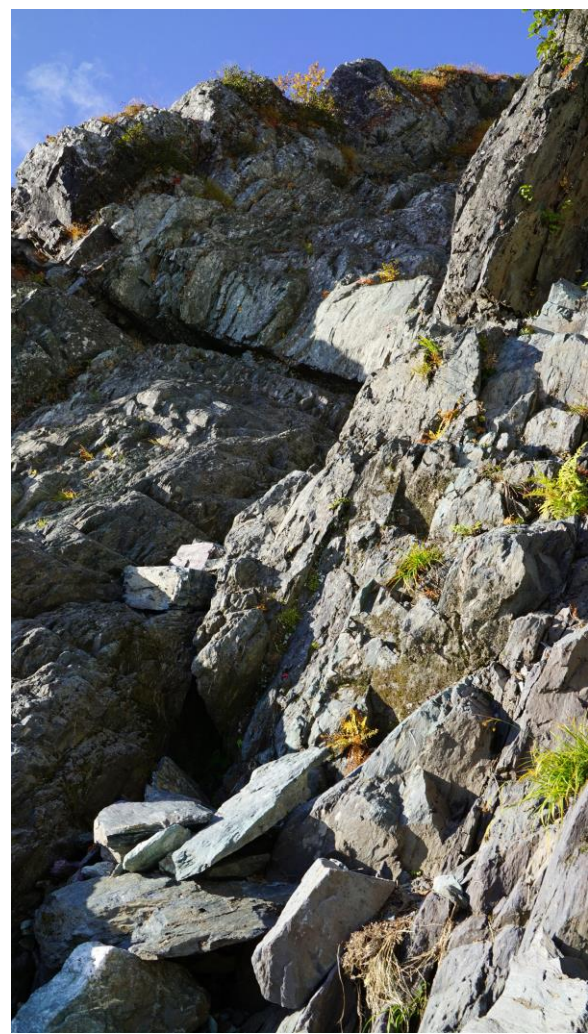
振り返ると
鳳凰が既に
目の高さ。
あたりはい
よいよ岩場
の雰囲気。



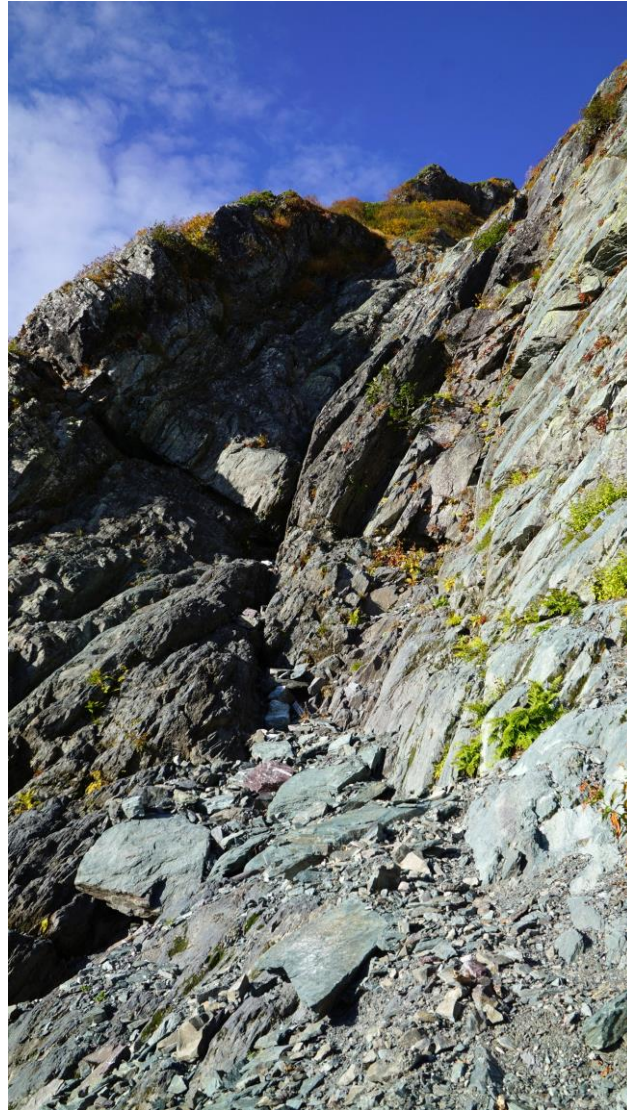


目の前に下部岩壁帯が姿を見せる。
圧倒的な岩壁だが晴れているせいか威圧感はない。
右手の岩壁帯は2010年、中川さんと共に登り、そして下った岩壁だ。

樹林帯の上の草付となり左手のdガリーへと向う。取付は5尾根の下のまだ日の射さない黒い影の部分。5:30に御池小屋を出て7:20取付着。



取付からは左手上の、斜めに亀裂の入った部分沿いに登り、5尾根の支稜に出て登攀開始。





7:40登攀装備をつけ出発。50mザイルのトップに藤原さん、40mめに竹中さん、ラストに金子の変則オーダーで登攀時間の短縮を狙う。

藤原さんが5尾根の上にスイスイと消えてゆく。



豊富な足がかり、手がかりのある快適なりッジだ。



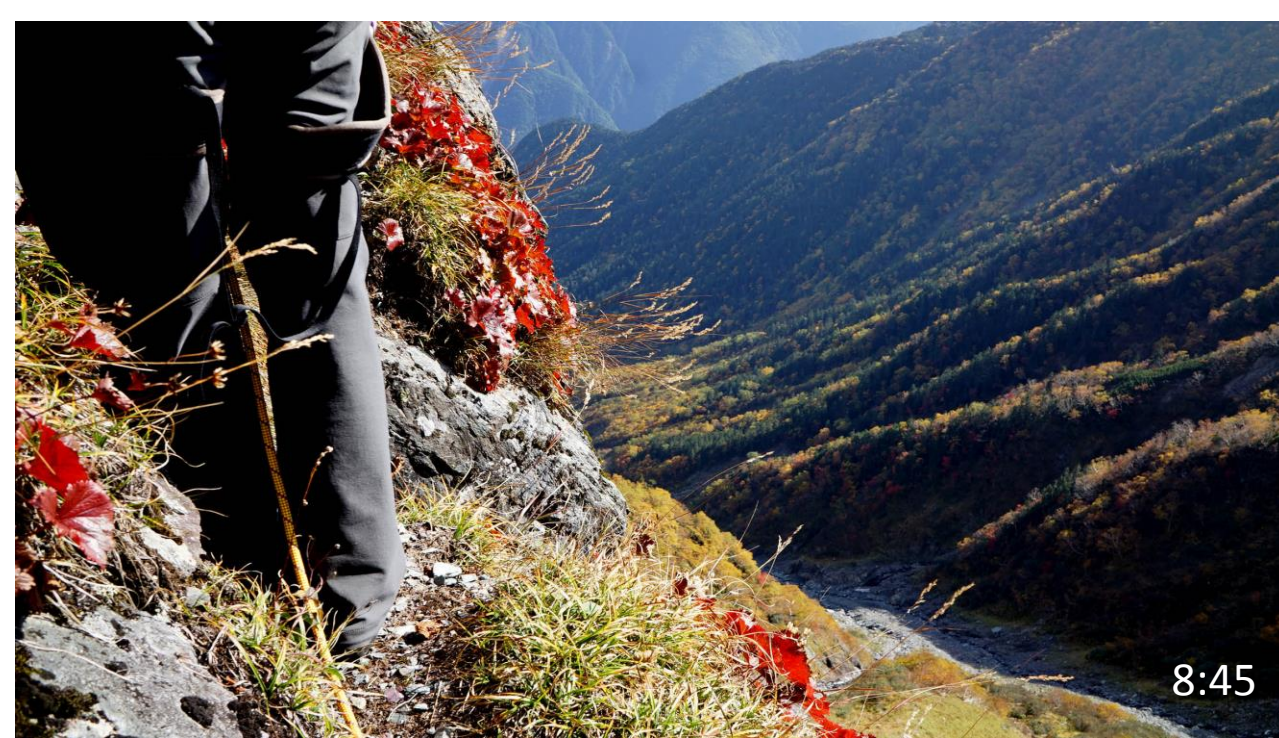
ザイルが40m伸びて次は竹中さん、10m後に金子。2ピッチ登ったところでdガリー横断ポイント（8：20）。右手に大小のハングの続くピラミッドフェースが迫る。緩傾斜帯はここからもう1ピッチ登った地点の様子で、そこから黄色線に従いトラバースすれば前回の取り付きまで素直に行けたのかもしれない。



dガリーの上部、4尾根下部フランケに取り付いているパーティーが見える。今朝のアプローチの途中で見つけた足跡のクライマーだ。

緩傾斜帯を4尾根末端へトラバースする。ルートは簡単に分るかと思ったが意外に複雑。本来はもう少しdガリーを登って緩傾斜帯を横断すべきだったところ、赤線のようにやや下で横断した為だ。水平に4つのハングが並んでいるがその左から1つめと2つめのハングの間のバンドを右へずり上がり4尾根末端の樹林帯に入る。



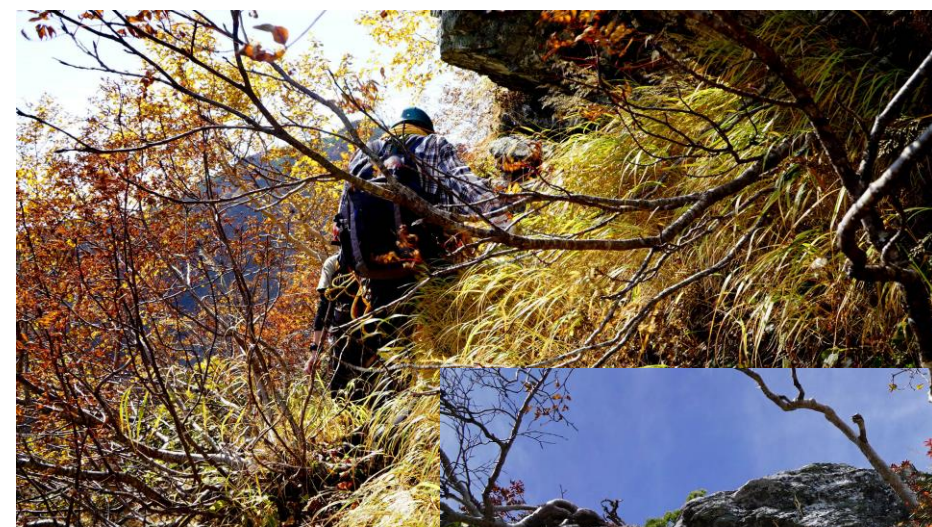


8:45

緩傾斜帯のトラバースではハングの下の踏みあとが狭く、高度感があり気持ち悪いと言う情報が有った。確かに外傾した踏みあとの下はすっぱり切れ落ち、大樺沢がぱっくり口を開けている。



樹林帯に入り回り込むと前回通ったcガリー上のトラバースバンドらしきところに出た。しかし、どうも様子が違う。踏みあとを登る。



ほどなく、かつて辿った
トラバース地点に着く。
そう、そこを左に進めば
前回の取付だ。クラック
の立った大岩がのしかか
って来ている。
矢張り緩傾斜帯の横断位
置は下過ぎたのだ。

8:59

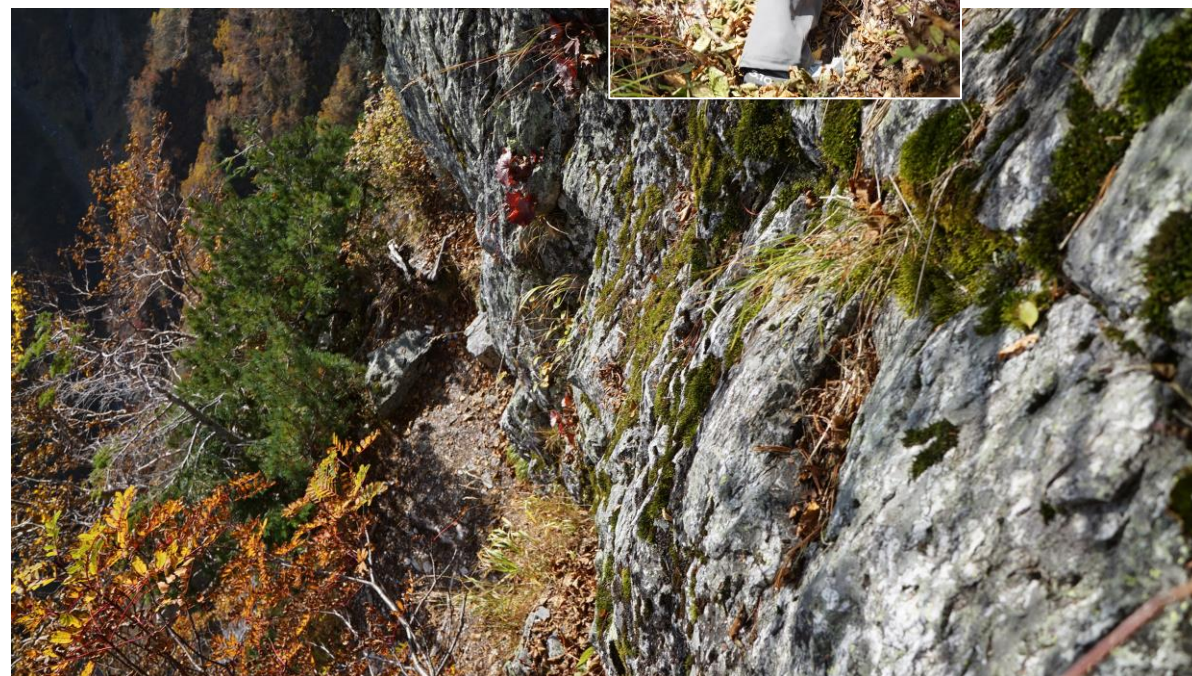
この時点で8:59。出発から既に3時間半かかっている。前回は？と言えば4時半発でここに9時着、4時間半かかった。

今回は前回大苦戦した大岩は避け、右手奥の岩を越え、明瞭な踏みあとを辿る。

9:06



前回撤退の折藤原さんが下ったこの踏み
あとは確かに歩き易く、登りで中川さん
が苦戦した1ピッチは難なくバイパス。

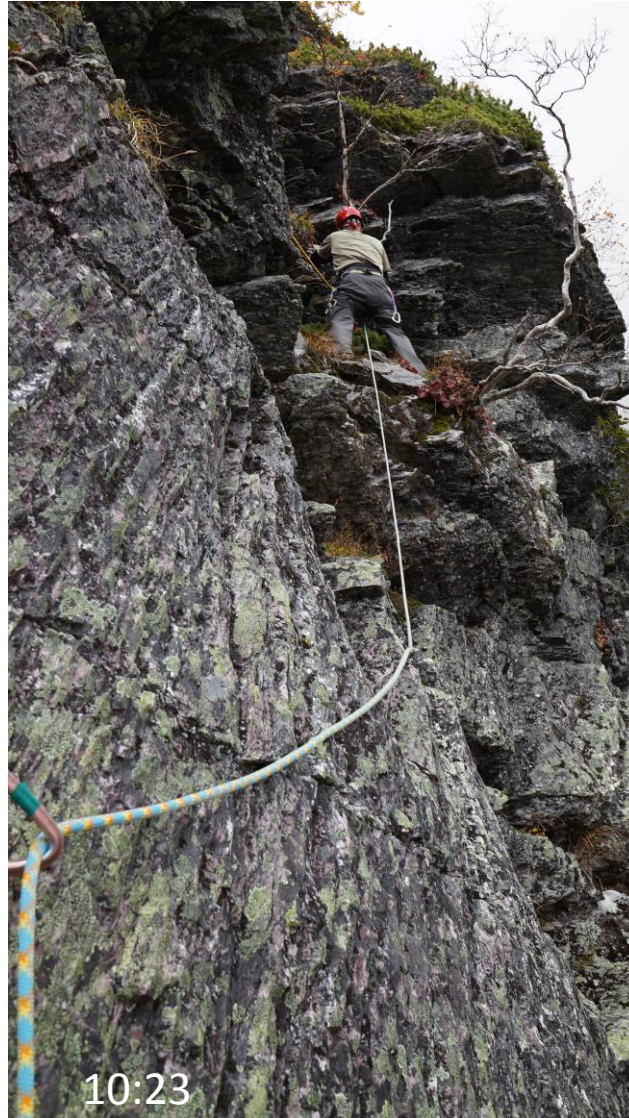
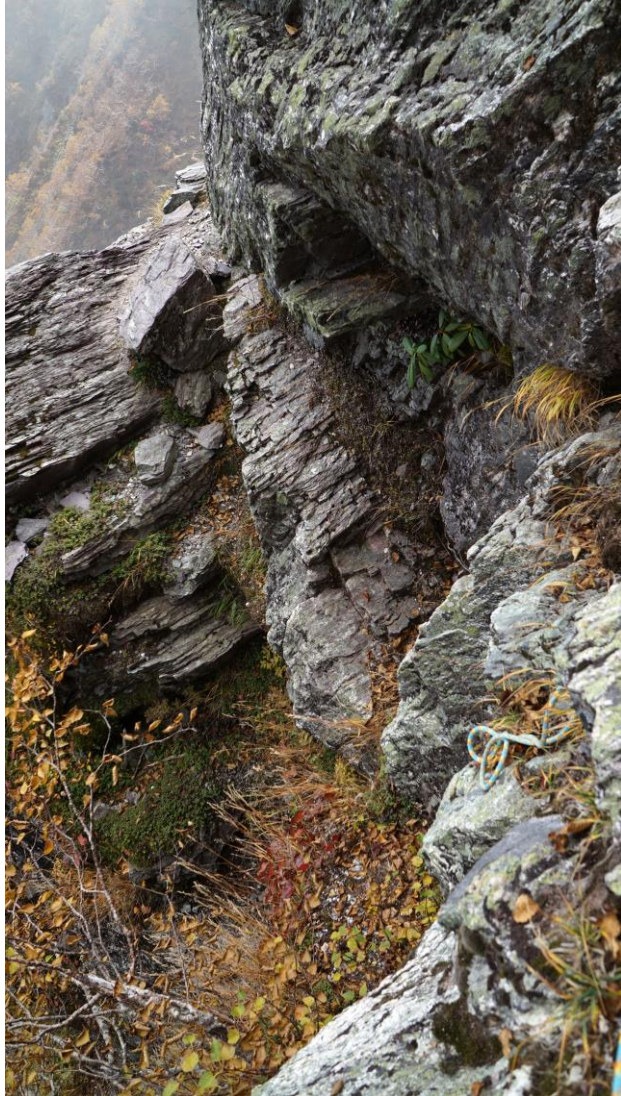




途中、前回ピッチを切った地点を横目に見ながら踏みあとを直上、二つめピッチのテラスにつき、いよいよ岩にとりつく。1尾根、2尾根がすぐ隣に屹立している。テラスの右上上の壁は登り口に外傾した出っ張りがあり、これを乗り越えるのが結構難しい。前回もそうだった。藤原さんはザイルをたらしながらすいすいと登って行き、その上に4尾根の通常取付があることを確認する。



続いて竹中さん。外傾した出っばり
りで苦戦する。幾度か乗り越えを
図るが今少し足りない。結局ザッ
クをおいて5mほどを空身で挑戦、
ようやく乗り越えた。この間1時
間かかった。





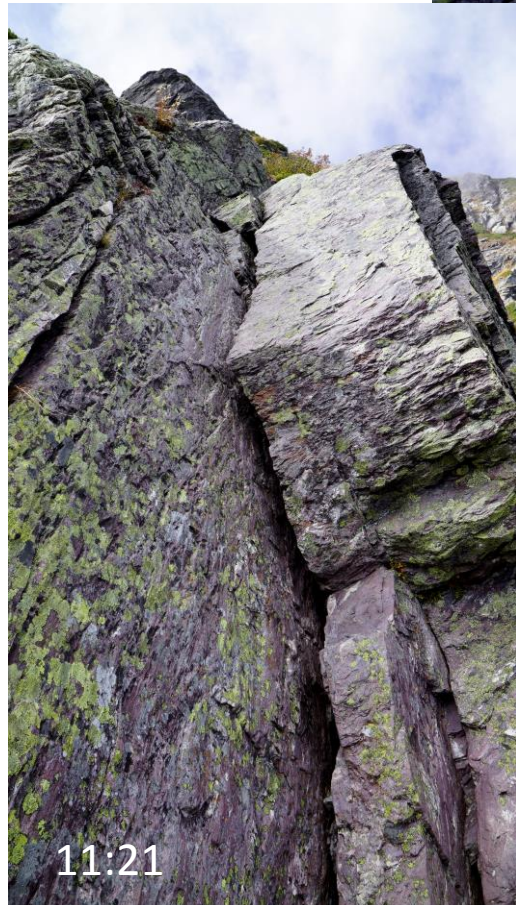
10:52

晴れていた空に霧が舞い始めた。途端に何だか陰惨な雰囲気になる。通常取付点はここからのっぺりしたフェイス状の岩を登ったところ。

前回とほぼ同じ11時、4尾根通常取付到着。dガリーの取付から既に3時間半かかっている。目の前に赤い岩に挟まれたツルツルの有名なコーナークラックが伸び上がっている。



11:45



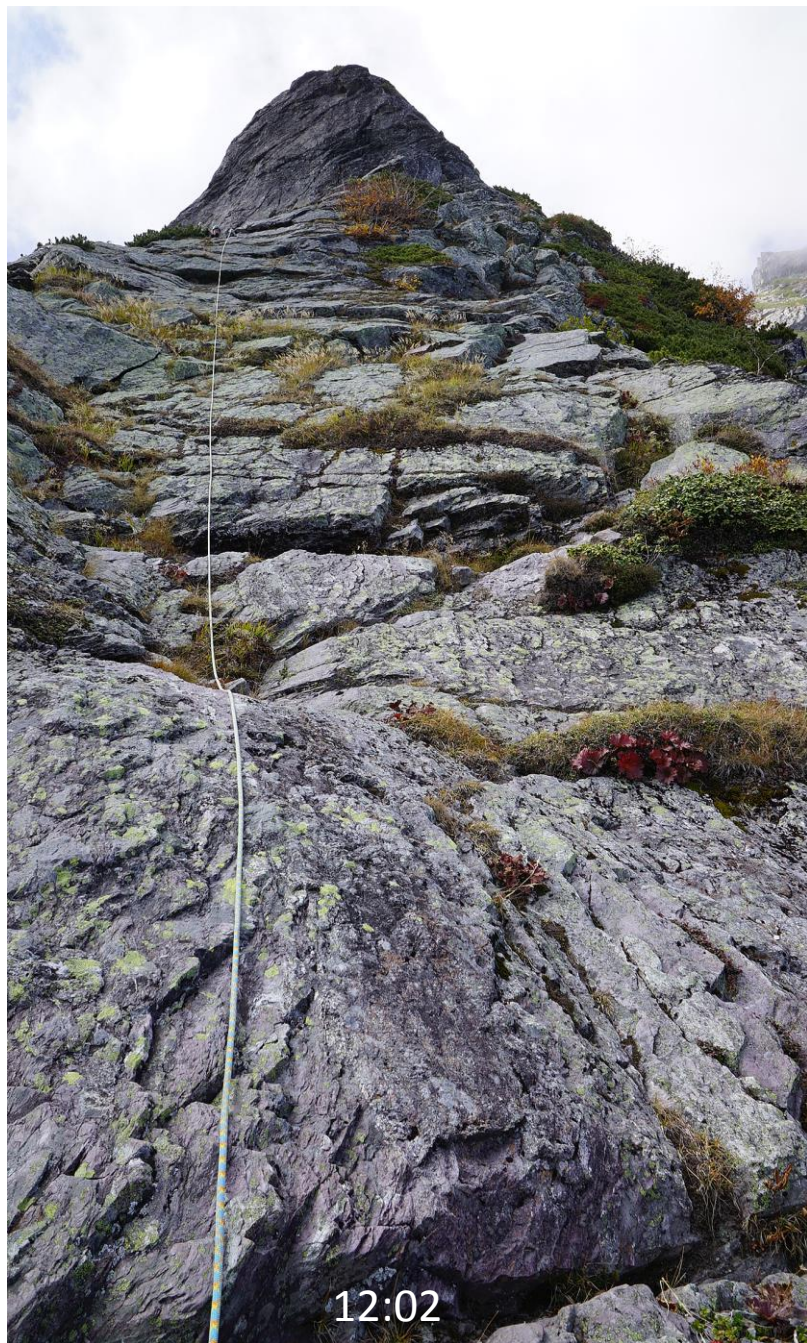
11:21

「さあ、これからどうしよう？」藤原さんが質問。「行きましょう！」とぼく。どう言うわけかこの時点でぼくは大分興奮してしまっていたらしい。

「既に11時」という意味合いを現実的に認識できず、登り続けることしか考えていなかった。

「城塞のチムニーまで行ってハングを乗り越えられないとにっちもさっちも行かなくなるよ」。トップを進みながら、とっくにこのペースでは登りきれないことを認識していた藤原さんがやさしく断言する。

そうか、今やそう言う状況になっているのだ、、、ようやく目が覚めた。藤原さんは空身になってせめて4尾根最上段のマッチ箱を目指し（その先は崩落している！）、その後はクライミングダウンをしようと提案する。確かにそれしか無い。11:40登攀開始。クラックに爪先をねじ込み振り上がる。そうしながら、学生時代、45年前の5月、無骨な登山靴を同じクラックにねじ込んでスイスイと登った記憶が鮮烈に蘇った。何故あれほど無頓着だったのだろう？ 若さと言うものの爆発力と危険を改めて認識しながらツルツルの岩をなで回す。その4ヶ月後に事故は起きたのだ。



12:02

クラックを抜ければ草付きの明るいフェース。走っても登れる様な快適なピッチだ。正面にピラミッドフェイスの頭が正に巨大なピラミッドとなっている。ようやく本来の4尾根だ。右手では1尾根の正面壁がこちらとほぼ同じ高さになった。

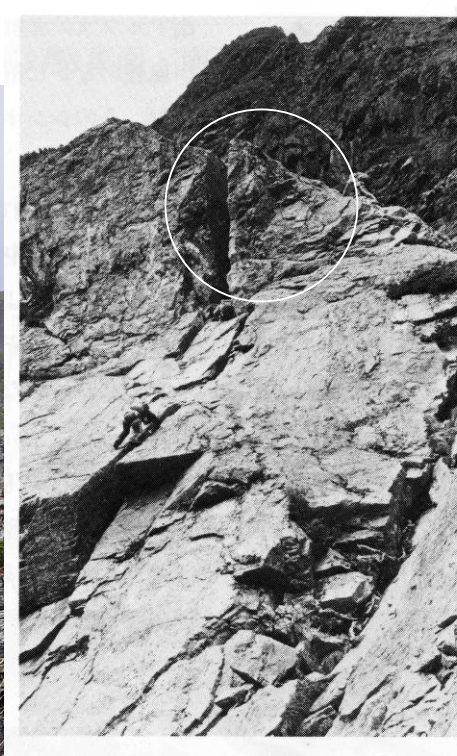




コーナークラックから2Pめのこの地点で竹中さんは終了。そのあとはぼくがトップに立ち藤原さんとマツチ箱先端を目指す。ようやくサウンドな岩となり、藤原さんはぼくにリードさせても良いと判断したのだろう。彼は今日だけでなくこれまでの様々な思案を全て1人で背負ってきた。それを最後の最後にこちらに渡してくれた。勇んで先に立つ。



12:38 高度感のある楽しいリッジが続く。



12:45

垂直に近い5mのフェースをいくつもある残置ハーケンを頼りに登り、右上してフェースを越えると両側が切れ落ちた気持ちの良いナイフエッジ。30mでマッチ箱の頂点。アップザイレン用のビレイが目の前にあってそれを確認する。到着12:45。正面に折からの霧に巻かれた中央稜。左手に城塞。1981年の岡田昇氏の写真と比べれば崩壊部分がよく分る。右端の3角形の岩がすっぽり崩落している。本来であればここからアップザイレンしてコルに降り、城塞ハングの一番右のチムニーを上に出るのだが、新たな予定通り、もうこれで終了としていいだろう。

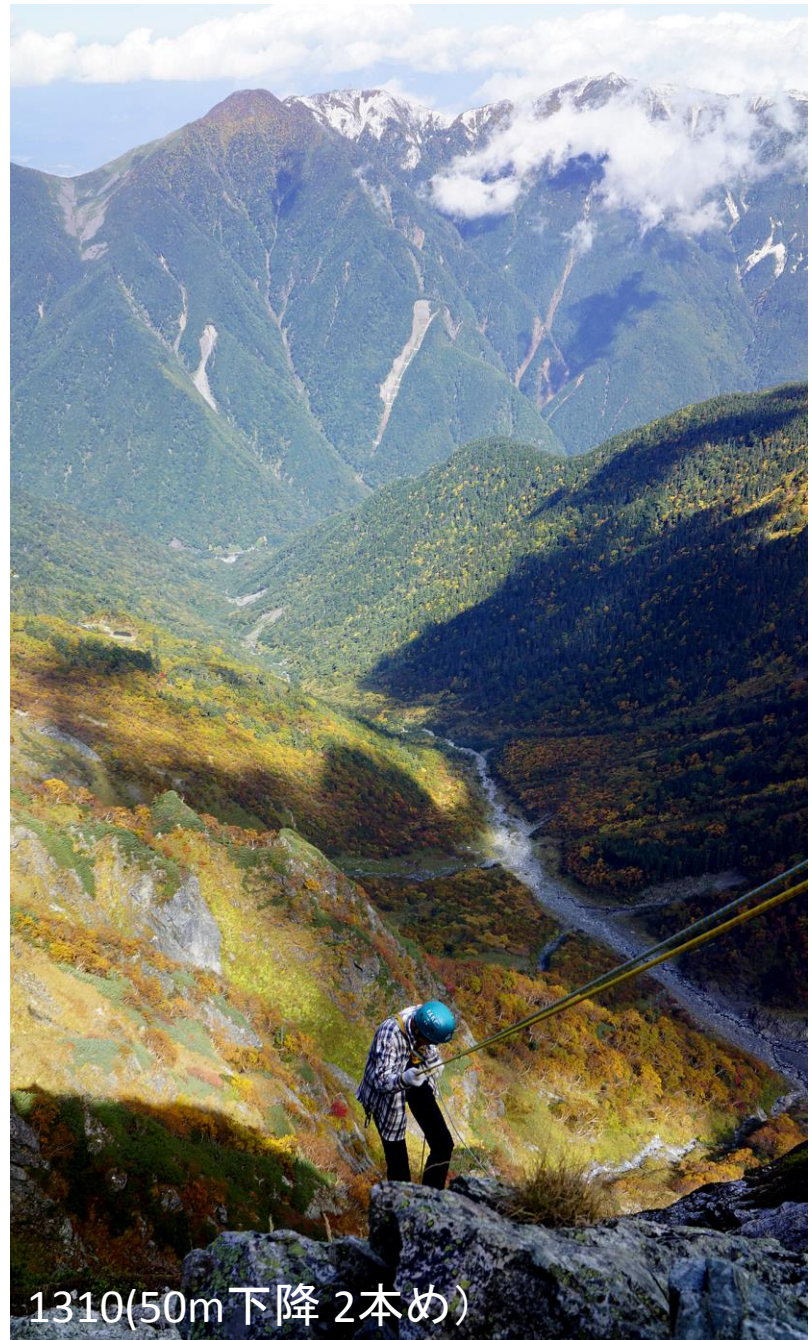


アップザイレン用のビレイにザイルをセットし、コル側ではなく、ナイフリッジ側にザイルを落とし、12:48下降開始。左手のシュバルツカンテには先ほど下から見上げた若い男女のパーティーが取り付き「ゆうこさん、あと10m」などとぼくらは別次元の優雅なクライミングをしている。それも若さか。

12/44 (50m1本め)



1258



1310(50m下降 2本め)



重力に逆らいつつリッジ通しに下るのはなかなか難しい。油断するとあらぬ方向に振られてしまう。また、50mザイル2本で下るので、下から引き下ろす時、どこかに引っかかってザイルが動かなくなることがひどく心配。それでも覚悟のクライミングダウン、次第に楽しくなってくる。





13:2525

太陽がピークの向こう側に回り影が濃くなってきた。下には池山吊尾根、右には北岳への一般登山道の尾根。





13:34



13:30



13:43(50m 3本め)



13:44

4尾根取り付き点からは、20m下のポイントに降り、次いでdガリー大滝めがけてピラミッドフェイスをほぼ垂直に下降する。



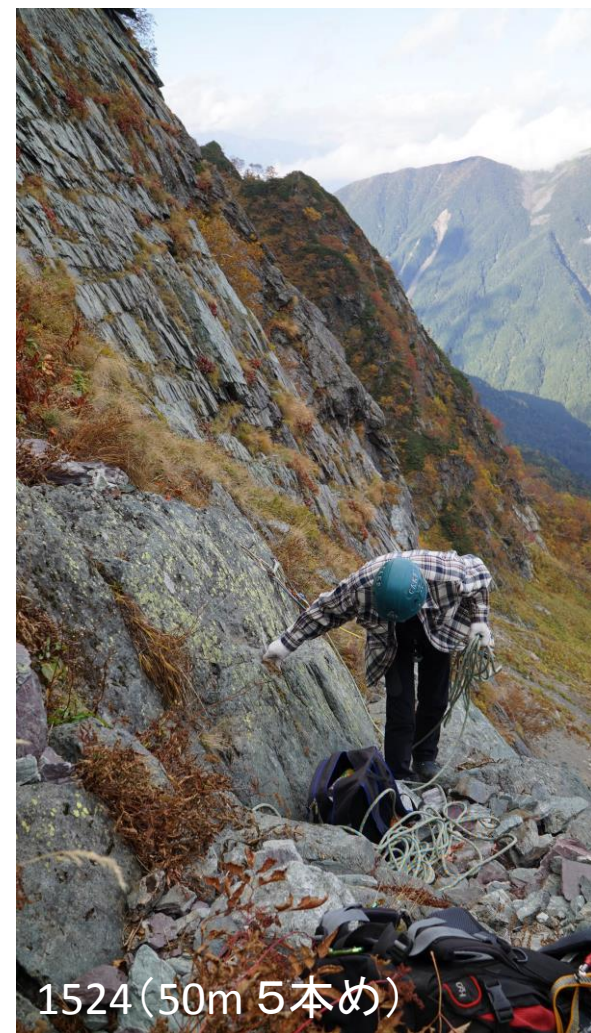
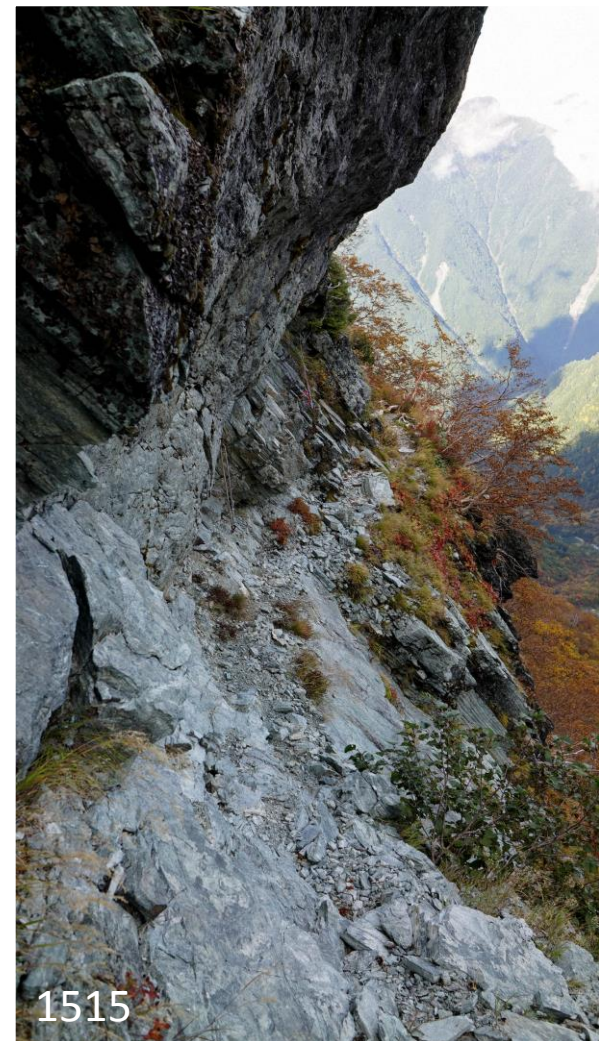
14:35 (50m 4本め)



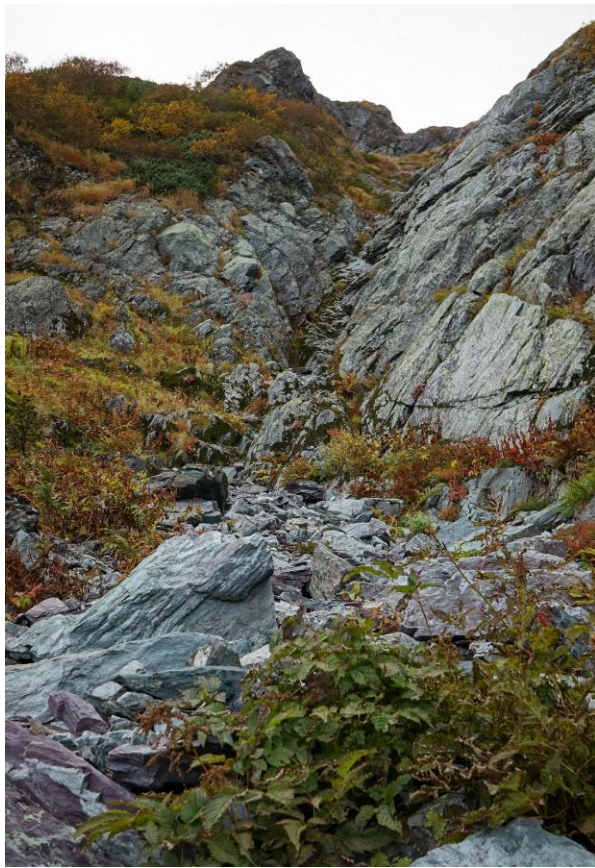
14:41



14:51



途中ピラミッドフェイスのハング帯のど真ん中を通過。幾度も空中に浮く超刺激的下降。

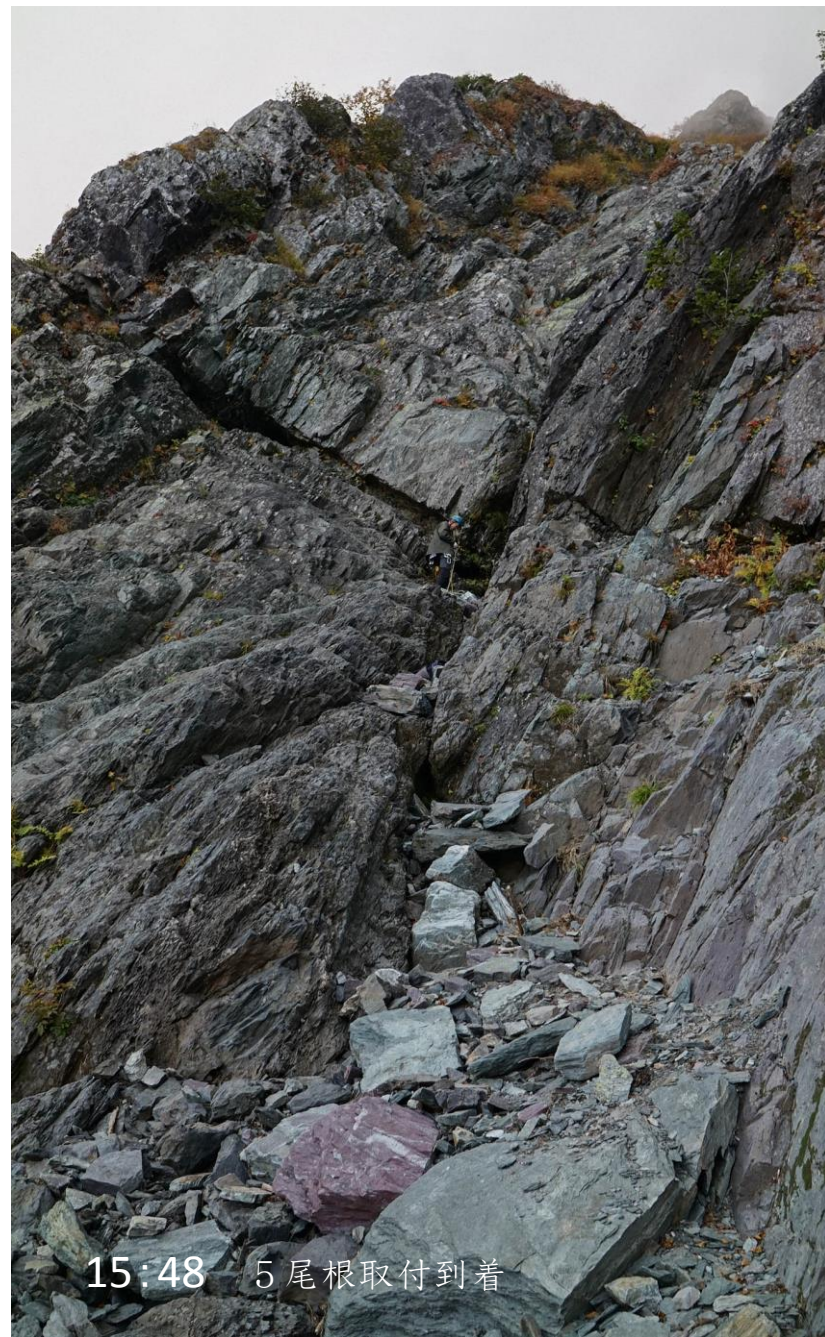


dガリー大滝は一回の懸垂で一気に
下降。出発点に戻る。





15:39



15:48 5尾根取付到着



5尾根の取付からマッチ箱上までほぼ5時間。同じコースを下るのに3時間20分。
下降中は緊張で疲れも感じなかったが下ってきてさすがに足が震えた。
6回にわたる50m下降の途中、ザイルが無事回収できたのは幸이었다。



御池小屋到着17:21 出発以来12時間の行動。頂上まで抜けきることはできなかったが全員無事で所期の目的をある程度まで果たせたことに感謝。
2010.10.7の同じ場所での集合写真には本間さんと中川さんが並んでいた。あれ以来、時は否応なく流れた。

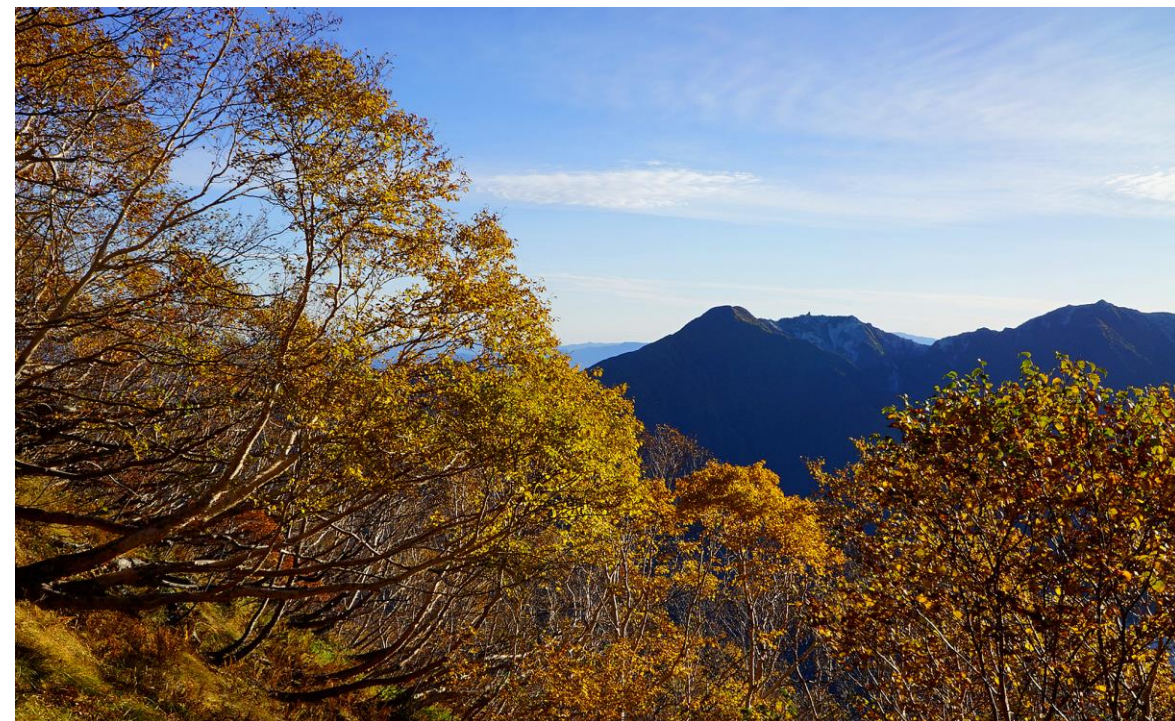


小太郎尾根往復

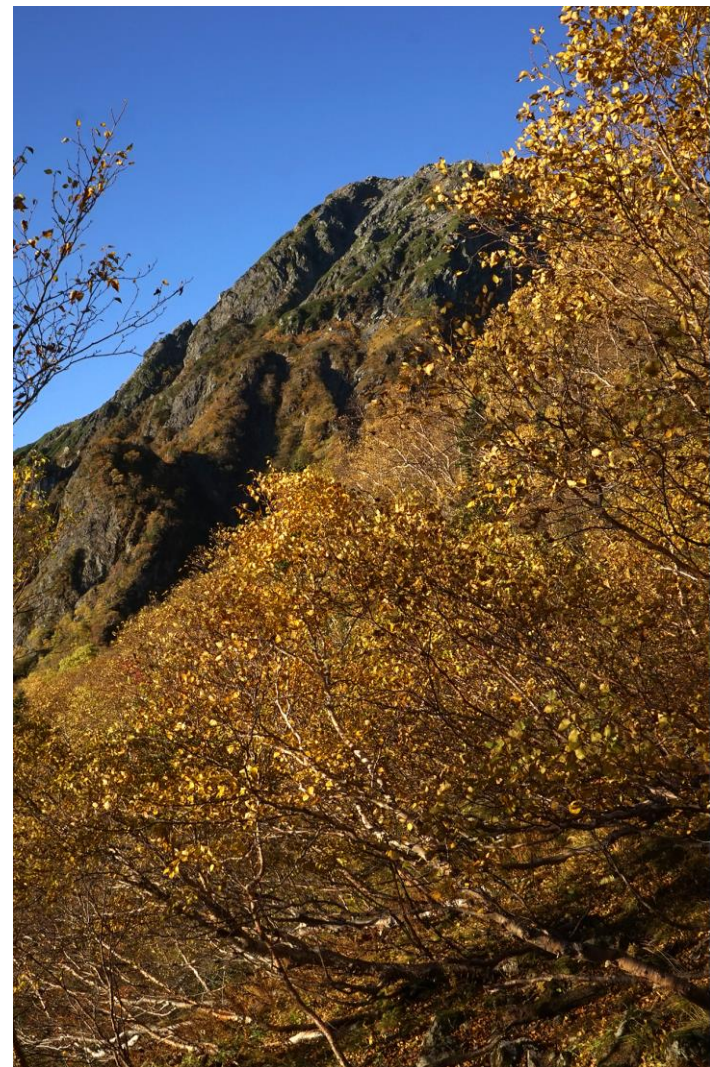
2015.9.30

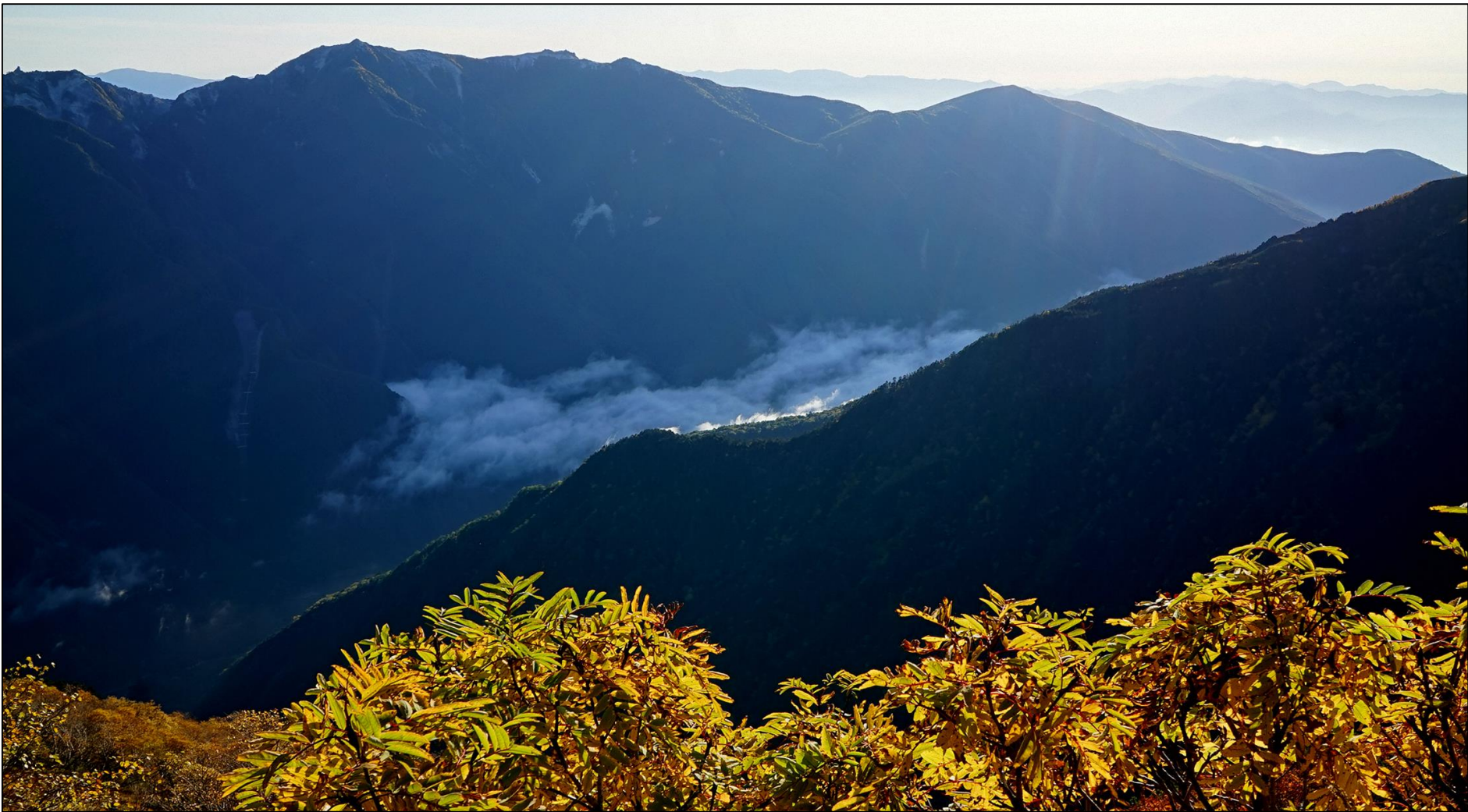
南アルプス北部のほぼ中央にありながらも滅多に訪れる人のいない、小太郎山(2752m)。藤原さんの山梨100名山行の愁眉を飾るにふさわしいということで同行させていただくこととした。





1ヶ月近く天気待ちしたおかげで山中3日めの今日も快晴。朝日に紅葉が映える。ジグザグと登る樹間から昨日登ったマツチ箱が垣間見える。下からはなかなか見えなかった地蔵のオベリスクも姿を現した。





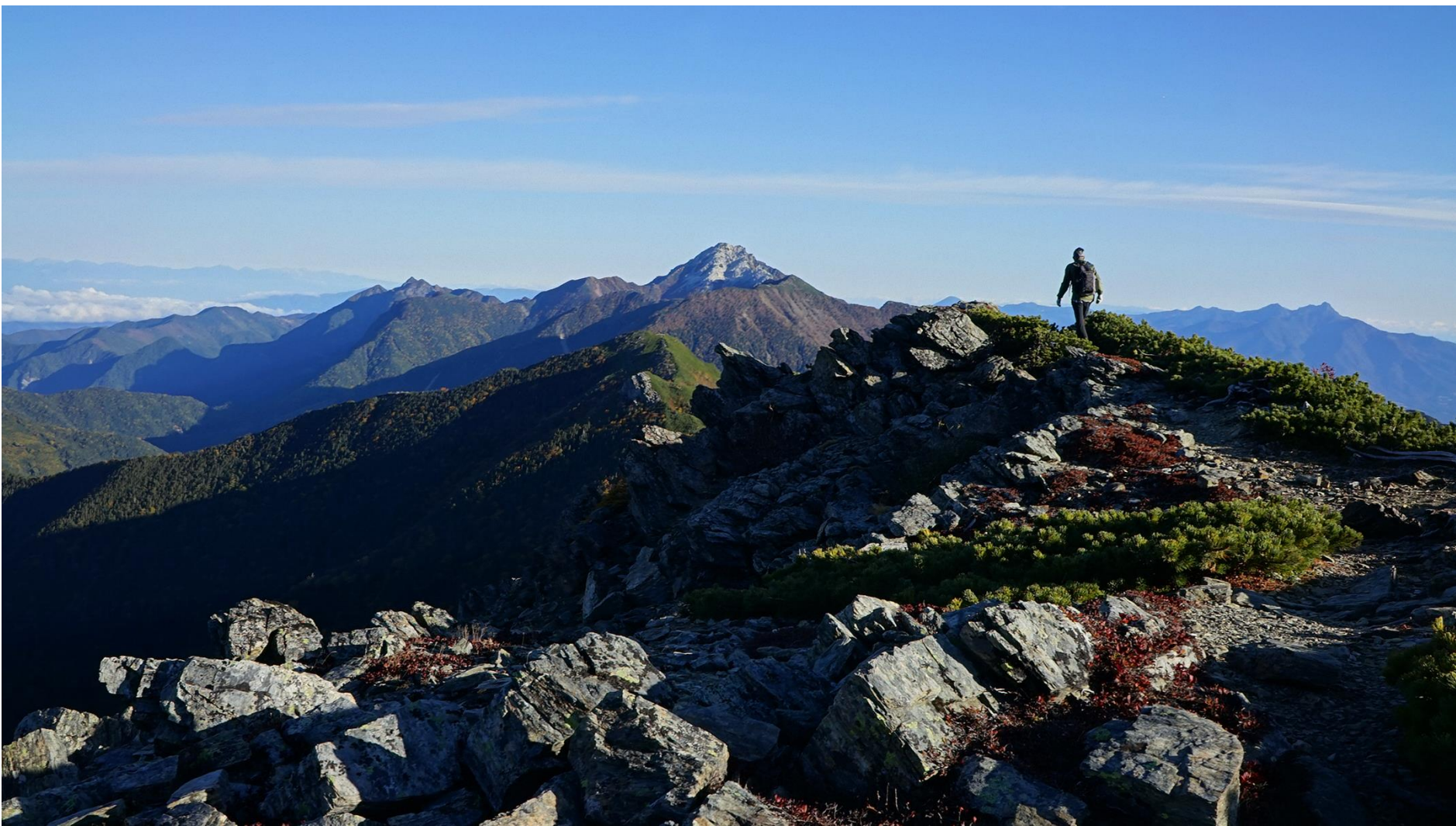
野呂川の上に川雲が湧き、そこに朝日が差し込み、見事な眺めとなる。
御池小屋からの草すべりの道はいつもながらの気持ちのよい急斜面だ。



1時間15分で稜線上の小太郎尾根への分岐点着。突然吹き飛ばされそうな強い北風。その風の向うに蛇行する小太郎尾根、ゆるやかな三角形の小太郎山、そして頭をかち割られた様な甲斐駒ヶ岳。



左手には仙丈岳。実に広大な空間。



恐ろしく冷たい風の中をバンダナを頭に巻いた藤原さんが軽やかに進む。
稜線散歩開始とは言え、風の強さは予想外。



最低鞍部を越えて登り始めた地点から振り向いて見る北岳。



這松におおわれた小太郎山が近づく。



07:50、分岐からほぼ1時間
で小太郎山到着。





甲斐駒はアサヨ峰(2799M)に遮られて頭部しか見えない。しかし、野呂川から一気にせり上がる樹林帯の急斜面の重量感は圧倒的。
藤原さんは念願の二つめの「山梨百名山踏破」ができて満足そう。次の目標は何だろう。8千mらしい！





南東に絵に描いた様な富士山、櫛形山、千頭星山。背後には北西に向け同じ様な山の重なりの方に穂高連峰。富士山から穂高まで、左右に儀仗兵の様な側稜が続く、深い回廊が一直線に続いている。小太郎山はその巨大な回廊を見晴るかせる唯一の場所だ。



往路ではまだ太陽が低く、稜線の西には日が差していなかった。
それが復路では変わった。西側の側稜上の樺の木の黄葉が光る。
分岐まで約100mの登りだ。

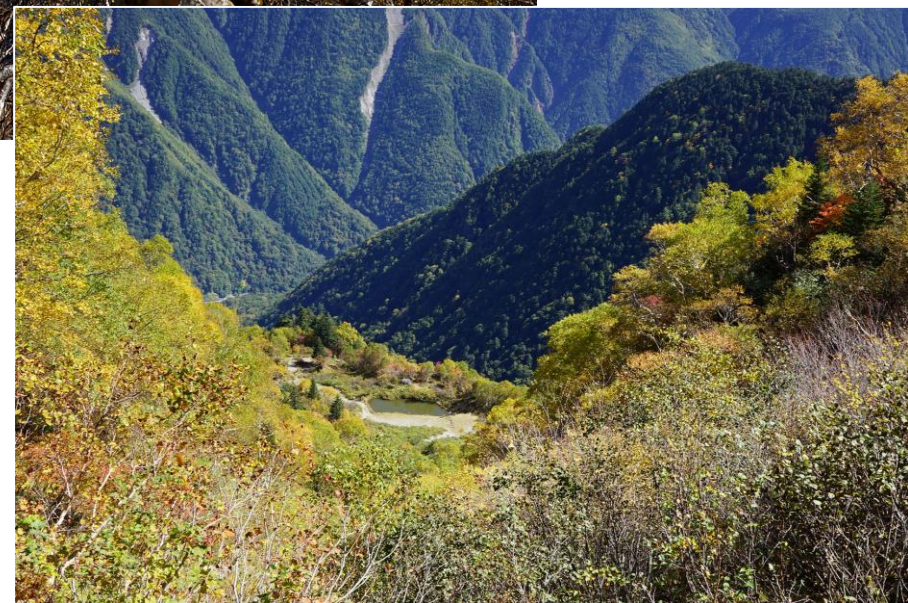


小太郎尾根は単調な平坦道と思っていたが、実際は縦走路というものの美点を全て備えた見事な天上廊下だった。当初の冷たい強風も止み、激しかった山行きの最終章にふさわしいのどかな雰囲気になってきた。





分岐の手前で小太郎尾根を振り返る。氷河が削ってできた二重山稜が尾根道の表情を豊かにしている。
分岐着9:17、往復2時間20分。ここだけを目指して登って来る価値もある山稜だ。



わずか2泊3日にいろいろな物が詰まった山行だった。念願のバットレスを足掛け7年でようやくトレースできた。学生時代に何のためらいもなくトレースした同じルートは67歳にとっては格段に重く、難しいものになっていた。冬の鹿島槍もそうだった。おそらくこの間に様々なことを知ったことと体力の減退がその理由だ。おかげで今の生の実態をいやと言うほど思い知らされる。だからこそ山はいくつになっても登り続けなければならないものなのかもしれない。御池小屋到着10時、広河原着11時にて終了。